

成果と課題

「ニュースバリューとしての EU EU 認識研究の視点から」

福井英次郎

慶應ジャン・モネ EU 研究センター

共同研究員

EU は 1990 年代初頭の設立以来、深化と拡大を続けてきた。諸制度が成熟するにつれて、国際政治の重要なアクターになりつつあるという見方が拡大しつつある。その結果、「EU は何をする・できるのか」という研究に加えて、「EU は何をする・できると思われているのか」という EU 認識研究も活発化しつつある。

本発表の目的は 2000 年代より活発化している EU 認識研究の視点に立ち、日本における EU の位置づけの変化をニュースバリューの観点から明らかにすることである。今回の発表では、G. タックマンの「ニュースの網」概念を用いて、日本のジャーナリズム組織における EU のニュース的な価値の変化を多角的な分析を試みた。「ニュースの網」では、海外特派員数によってその地域のニュースバリューを計測するという手法をとる。

分析の結果、EU はその誕生時期である 1990 年代初頭には米国をしのぎ、最もニュースバリューがある地域であったことがわかった。しかし EU の拡大と統合が進むにつれて、ニュースバリューは減少を続けていた。この減少傾向は欧州域内の特派員数の減少という絶対数だけでなく、全体数に占める欧州内の特派員数の比率でも同様であった。つまり欧州統合の進展によって EU の重要性は増しているという一般的な認識とは異なり、むしろ減少しているのである。さらに欧州内の国や都市などについても、他の地域との比較などを通じ分析を加えた。最後に、欧州のニュースバリューの低下の理由について仮説を提示した。

以上の議論に対して、数多くの有益なコメントをもらうことができた。ここでは 3 点を取り上げておきたい。第一に、特派員の派遣状況と実際のニュース量との関係性である。第二に、また特派員の属性や状況を量的ではなく質的に分析する必要性である。第三に、国際的なニュースの位置づけの低下との関連性である。これらの課題を踏まえて、今後の研究を深めていきたいと考えている。
